

## 東久留米の戦争遺跡

近年、戦争の惨禍を後世に伝えるために、戦争に関する遺跡の調査や資料の収集が注目されるようになりました。さらに戦争遺跡の文化財指定も行われるようになり、近隣では東村山市の東京陸軍少年通信学校跡地が旧跡に、東大和市の旧日立航空機立川工場変電所が史跡として文化財に指定されています。東久留米市でもこれまで戦争関連資料の調査を行ってきましたが、市文化財保護審議会の答申を受け、本年9月に武蔵野鉄道引き込み線跡と北多摩陸軍通信所跡が東久留米市の旧跡に文化財指定されました（旧跡指定は東久留米市所有地部分・巻末注参照）。本号はその2か所について解説します。

### 武蔵野鉄道引き込み線跡

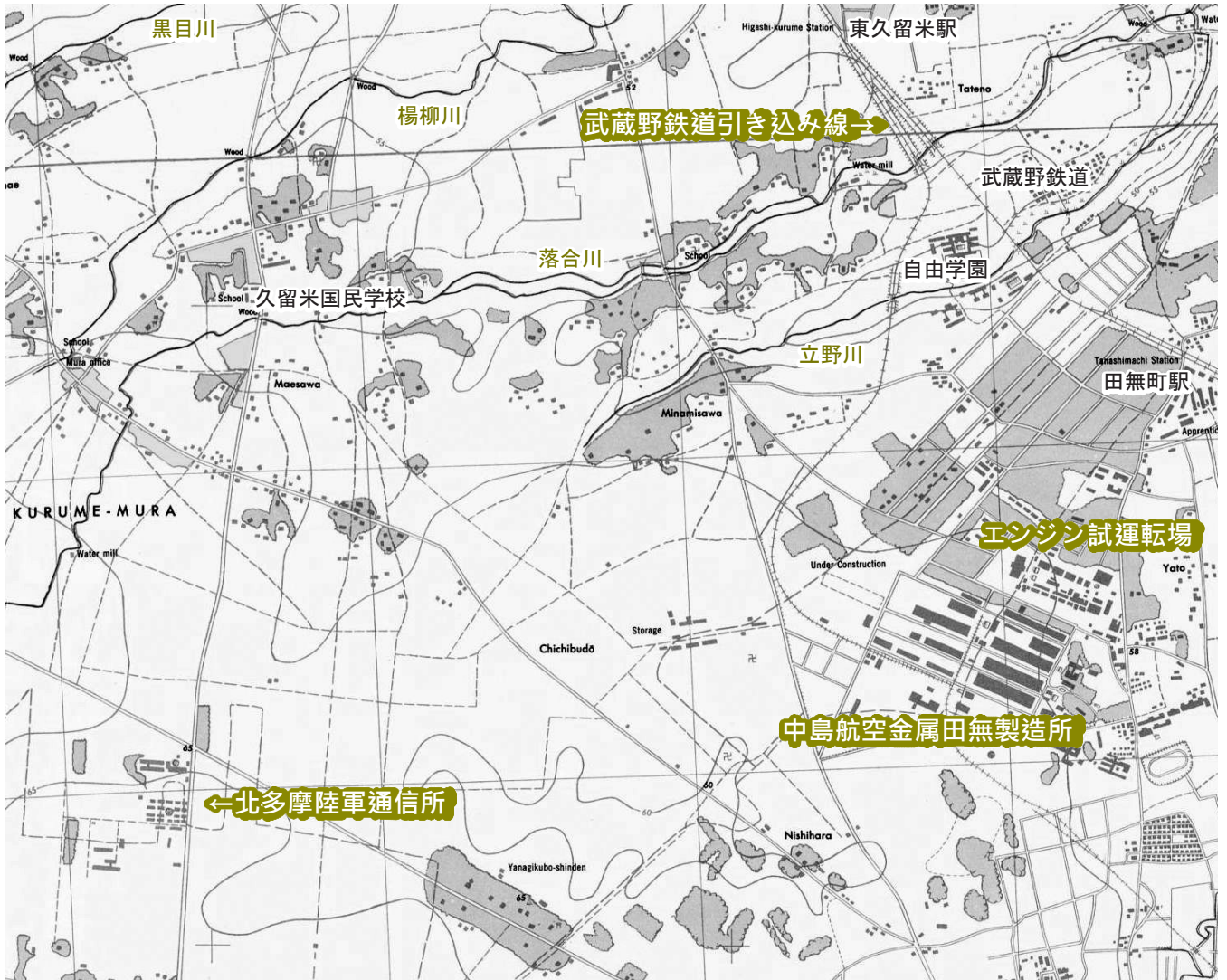
南沢の竹林公園と自由学園の間を幅2mほどの細い遊歩道が南北に続いています。これが「たての緑地（緑道）」で、地域の人々の散歩や通勤・通学路として親しまれています。しかし、この遊歩道がかつての鉄道の軌道跡であり、しかも昔の軍需工場に続いていた線路の跡であることを知っている人はあまり多くはありません。



武蔵野鉄道引き込み線とその周辺（昭和22年米軍撮影空中写真部分・国土地理院）

昭和10年代から平坦で広大な面積を持つ武蔵野には、数多くの軍事施設や軍需工場が存在しました。なかでもゼロ戦などの軍用機エンジンを作る国内最大の中島飛行機武蔵製作所が当時の久留米村の南東約4kmの武蔵野町にありました。さらに久留米村の東に接する現西東京市谷戸（当時保谷町・田無町）には武蔵製作所の関連工場である中島航空金属田無製造所という大きな工場やエンジンの試運転場もあったのです。昭和19年（1944）にこの中島航空金属田無製造所へ東久留米駅から鉄道の引き込み線が敷設されました。その一部が現在の「たての緑地」です。この引き込み線は、軍用機エンジンを作るための鋳型用の砂などの材料や燃料を運搬するのが目的で、当時実際に目撃された方の証言によれば、小型蒸気機関車（雨宮製作所C型18t機関車と考えられています）が6輛前後の貨車を引いて、時速20kmほどの速さで走っていたようです。

今の西武池袋線は、当時は武蔵野鉄道と呼ばれ、引き込み線は武蔵野鉄道の側線（そくせん）として作られ、正式



昭和20年当時の久留米村周辺（米軍作成 1945・1946：テキサス大学公開地図に日本語名称を一部加筆）



現在の引き込み線跡

名称は「東久留米駅構外線」でした。全長2.84kmの単線で、東久留米駅から南へ向かってすぐに落合川（鉄橋）を渡って畑地を進み、自由学園の西側の窪地を埋め立てて造成した築堤（ちくてい）の上を走り、立野川の水路を渡っていきます。その先は、逆に立野川南側の崖を切り崩して軌道を作っており、両側には高い壁が続いています。それを越えて南西にカーブを描きながら平坦地を進み、その後現在の南中学校付近で東に急カーブを描いて曲りながら田無製造所まで続いていました。この終点が現在のひばりが丘団地付近です。昭和18年末に用地買収を開始し、19年1月運輸通信大臣に申請、同年8月に認可という過程を考えると、落合川と立野川を渡り、崖を切り崩し、窪地を埋めるなど、変化に富んだ地形を短期間で行わなければならなかった難工事であったことが予想されます。

この引き込み線は、結果的には運転開始からわずか1年ほどの昭



和20年8月の終戦とともに廃線となりました。しかし、しばらくはレールも残っており近所の子供たちの遊び場になっていました。現在は落合川の南の学園町一丁目の踏切付近から市立南中学校裏までのほとんどが公有地化され、全長約850mにわたって周囲に緑地を配した遊歩道として整備されています。また、民有地ではありますが落合川北側には軌道の築堤が部分的に残っていたり、落合川に架かっていた鉄橋の南側のコンクリート橋台も見ることができます。

武蔵野鉄道からの分岐点であった東久留米駅は近代的な駅西口に姿を変え、南の終点の田無製造所はひばりが丘団地となってその面影もありませんが、この引き込み線跡は、かなりの部分が残っている貴重な戦争遺跡の一つといえるでしょう。

## 北多摩陸軍通信所跡

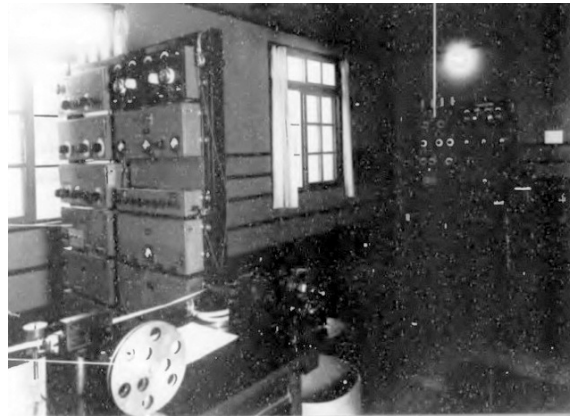
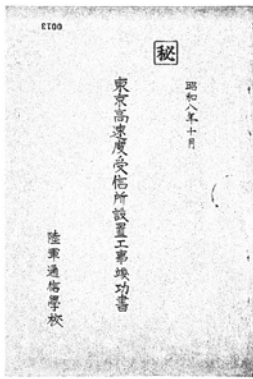
昭和8年(1933)3月、電波状況の良好な久留米村前沢1470番地(現在前沢五丁目)に海外無線の傍受を目的とする「北多摩陸軍通信所」が開設されました。すべての施設の竣工は10月ですが、当初は、1500坪(4,950㎡、現小平市花小金井四丁目にまたがっています)の敷地に木造平屋の受信所(350㎡)が建設され、敷地の四隅には高さ45mの自立式鉄塔4基(逆L字型空中線)が建てられました。また、その南側には職員用の官舎も建設されました。通信所は、東京の参謀本部が所管し、三宅坂の本部構内に記録所が新設され、受信所と総延長約30kmに及ぶ電信及び電話の連絡回線で結ばれて情報が伝達されました。また、重要事項は1日1回連絡員が直接書類を搬送したといわれています。

その後、昭和15年(1940)と19年(1944)の2回の増設により、敷地面積12万坪(空中線建設地の借地を含む)、高速受信機・低速受信機など53台の受信機を設置した千数百人の人員を要する海外無線傍受の中心的な施設となりました(『日本無線史』九卷)。官舎や兵舎も増設されましたが、人員の収容に不足を生じ、久留米国民学校や久留米学園を宿舎にするほどでした。通信所は、昭和18年8月に「陸軍中央特殊情報部通信隊」と改名され、ソ連や英米などの海外無線の数々の歴史に残る重要な通信の傍受や解読にあたりました。日米開戦時のアメリカ側通信、特殊爆弾(原爆)投下に伴う爆撃機B



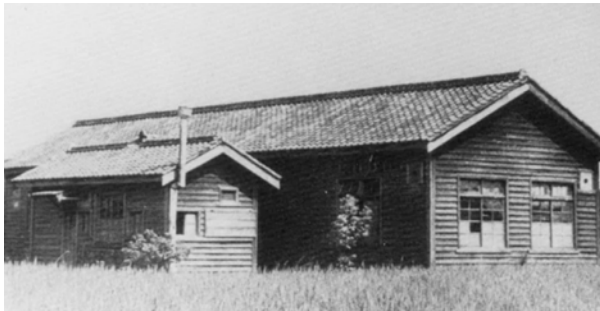
北多摩陸軍通信所 道路は現小金井街道

(上：昭和22年鍋島哲氏撮影・『光の交響詩』、右：昭和22年米軍撮影空中写真部分・国土地理院)



左: 工事竣功書と同書内受信所写真 JACAR (国立公文書館アジア資料センター) Ref.C01002946200、『東京高速度受信所設置工事竣功書』(防衛研究所戦史研究センター) 通信所は陸軍通信学校が「東京 高速度受信所」として設置工事を行いました。

下左: 通信所施設、下中: 官舎内の給水塔、下右: 自立式鉄塔の解体 (鍋島哲氏撮影)



29の動向、終戦時のポツダム宣言受諾の英米側通信などもあったといわれています。昭和20年8月10日に日本がポツダム宣言を受諾することが決定され、通信所でも12日以降書類の焼却などが始まり、15日に終戦を迎えて通信所は解散しました。戦後、敷地のほとんどが民間へ払い下げられ、鉄塔アンテナも昭和24年には解体されました。しかし、当初の施設中心部の碁盤状の区画は現在の道路とほぼ同一であり、南端の丸い防火水槽のあった長方形の敷地(前ページ写真参照)は国が所有する公園として今も残っています。また、最近まで東側の小金井街道の西武バス停留所には「通信住宅」という名称が使われており、その名残を留めていました。

その他にも当時の久留米村には、村の北東端の神山(現上の原の東久留米団地周辺)に旧埼玉県大和田町・東京府清瀬町に建設された「海軍大和田通信隊」の関連施設や木柱アンテナが広範囲に設置されており、当時の久留米村は陸海軍の海外通信傍受の重要拠点となっていました。それは、この地が雑音等の電波障害が少ない広大な平坦地を有する場所であったからとされています。

純農村地帯であった久留米村は、直接的には戦争とは遠い場所と思われがちですが、重要な軍需工場が周辺に集中していたことや軍の通信施設が設置されたことなどもあって、たびたび空襲の脅威にもさらされており(公式には7回の空襲の記録があります)、戦争の影響を大きく受けた地域だったのです。

注) 上記2件は、どちらも全体の原形が保全されている状態ではないことから、指定種別は範囲・面積等を特定しない「旧跡」とし、指定は東久留米市の所有地部分のみを対象としています。

(山崎 丈 東久留米市文化財保護審議会委員)

〔編集〕東久留米市郷土資料室(教育委員会生涯学習課文化財係)

〒203-0033

東京都東久留米市滝山4-3-14 東久留米市わくわく健康プラザ内

電話 042-472-0051 FAX042-472-0057